家族と離れ、母と二人、国境を越えた
隣国の病院は明るく、最新の治療が受けられる

母は鼻血の止まらない子を抱きしめる
だるげに、もたれる重みを受けとめる

検査と治療、慣れない暮らしが続いた
検査結果が出るたびに・・・
涙と共にあふれる思い

「もっと早く治療を受けさせたかった」
「あのとき薬があったなら」

母はひとりつぶやくだけ
だって、あの子は逝ってしまった

特集

・チェルノブイリ支援
　ポレーシェ学校児童一般検診
　　現地医師との連携で実施
・イラク支援
　子ども達の生きる姿をしっかりと伝えたい

グランドゼロ
64号　夏

CONTENTS

表紙写真　本橋成一

特集
チェルノブイリ支援
ポレーシェ学校児童一般検診
現地医師との連携で実施＜笛木百合子＞ 6
イラク支援
子ども達の生きる姿をしっかりと伝えたい
＜佐藤真紀＞ 10
アンマン便り＜井下俊＞ 16
2005年度 JCF 理事会報告 18
2005年 JCF スタディツアーのおしらせ 20
ナージャの輪通信 22
連載随筆「嘆きのかなた」＜宮尾彰＞ 24
ジーマのロシア小話 26
ベラルーシの食卓 28
モスクワ便り 29
振替用紙のメッセージから 30
ありがとうございました 32
チェルノブイリ 10 ドリームズ
子ども達の夢と未来をつないで 34
JCF 募金のお願い 35
出会い　Встреча 36
戦後60年を問う会・まつもと
映画「にがい涙の大地から」上映会のおしらせ 41
苦しんでいる人がいる限り問題は終わっていない！
＜川田龍平＞ 42
粗忽堂本舗＜村石保＞ 44
Здравствуйте！（事務局広場） 46
ニュースクリップ 48
本の紹介　Book review 50
ヒロシマを読む／ヒロシマを聴く 52
セイコーエプソン労働組合様より福祉助成を頂きました 54
事務局日誌 55

ポレーシェ学校児童一般検診

現地医師との連携で実施

笛木百合子（臨床検査技師）

ベラルーシ共和国チェチェルスク地区ポレーシェ学校の児童150人を対象に、超音波による甲状腺検査や血液検査などの健康診断を実施するため、第79次訪問団として、松澤重行小児科医師と笛木百合子臨床検査技師が3月12日～3月20日、渡航した。

飛び込んだファックス

3回目のベラルーシ訪問は2月中旬に1通のファックスが届いたところから始まった。「神谷さんが検診事業に参加できる人を探している、急いで手配をしたいので行けるのなら、生年月日とパスポート番号と有効期限を知らせてほしい」ベラルーシにいて困っているはずの神谷さんの顔が目に浮かび「何とかなりそう」と返事をした。

学校検診

2000年12月にポレーシェ学校で検診に参加してから4年以上経っていた。彼らはどうしているだろう？その後皆元気にしているかな？と時々思い出していた。なぜか懐かしいと感じる風景、食べ物、そしてあの可愛かった子どもたちに再会できるという期待に胸をふくらませた。今回の学校検診は現地の医師による甲状腺のポータブル超音波検査機のエコー検査、日本の小児科医師による診察、臨床検査技師や現地の看護師により採血された血液の一般的な検査を現地の機械を借りて行い、全ての検査が終わると医師から結果を校長先生と地区病院院長に伝えるというものであった。しかし予定通りにいかない、私たちの思うとおりにことが運ばないということは当たり前である。検査に使うはずだった血算機は故障していて、あわてて州立病院に検査をお願いした。ポータブルの超音波検査機はミンスクで貸してもらい、医師と看護師は日常業務の合間、検診に参加していた。チェチェルスク地区病院に立ち寄って彼らをピックアップしてから、ポレーシェ校に向かい、検診が終わるとまた地区病院に送り、ゴメリ州立病院検査室に検体を届けて検査をお願いして1日が終わった。

検診の終わった日に皆さんと給食をいただいた。ちょうど子どもたちとも一緒になったが3、4年生くらいの生徒がまったく離れ離れになって食べているのを見て、通訳のマリーナさんが「この年代の子どもたちは、男子と女子は敵同士のようなものです」と笑った。子ども用の食事で、もちろん私たちはお腹いっぱいになったことはいうまでもない。お粥のように見えたバター味のお米のミルクスープははじめて経験する甘くてやさしい味だった。

馬車の行きかう周りの様子も学校もまったく変わらないたたずまいで、玄関に入った時のにおいまで同じであった。ただ、原発からの距離が30㎞以上離れていることから国からの補償がなくなったり、以前見かけた道路わきの森に放射能注意の看板がなくなっていたことが大きく違う。汚染は以前と変わらないはずなのに？という疑問がわいた。子どもたちはやはり可愛らしかったが…。

病院

チェチェルスク病院のセルゲイ院長に松澤先生は結果を伝えた。「こちらの子どもたちの皮膚はとてもきれいです、アトピーや喘息の徴候もありませんでした」と。そうしたら「食べ物は大地からのものを食べています、アレルギーを引き起こすようなものはあまりありません。そして放射能の影響が良いのでしょうか？」と冗談がとびだした。

胎盤検査に協力してくださった、ゴメリ州立病院産科の女医スベトラーナ先生は少し風邪気味で鼻の調子がよくなさそうだったが、話している合間に次々とかかってくる電話にきびきびと答えながら指示を出している様子。部下を使うより17歳の娘さんを扱うほうが難しいとのこと、私も娘のことは同感だと納得した。挨拶や用件を伝えることも全て済んでから「東京が移転すると言う話はどうなりましたか？」と

聞かれた。

明るい日差しが入る窓の外では、雪の積もった病院の庭で、新しい命の紹介をする病室の窓辺に立つ愛する妻に向かってしきりに合図をする男性がいた。もちろん「ヤー　リュブリューチベヤー（愛してるぅー）」と叫んでいるはず。ロシアでは日本と違って産後の面会は許されていないとのことで、父親は5日経って退院する時に初めてわが子と妻に会える。花束を持って妻の母親と迎えに来ていた若いお父さんと退院する産婦さんにも別の日に偶然出会った。赤ちゃんはもちろん顔だけ出したぐるぐる巻。まるで棒のような長い巻物をそっと抱いて親子初めての写真を撮ってタクシーで帰っていった。

また産科のセルゲイ医師は情報収集について話をしていた。メールのやり取り、インターネット、衛星放送、携帯電話の普及はこの国にも及んでいることを痛感した。電話やファックスはなかなか利用できないのに、ＩＴの威力はこの国をも変えていた。先生はしきりにこの次はミンスクでコンサートやオペラ、バレエなどの劇場に行きましょうと松澤先生を誘っていた。

美しくなったベラルーシ

今回の旅をしていて一番痛感したことはお手洗いがきれいになっていたこと！ミンスクの空港でも、学校、レストラン、ゴメリ州立病院の検査室のそばでも、チェチェルスク地区病院でも、ホテルでもびっくりするくらい改善されていた。１９９７年にこの国を初めて訪ねたとき、家庭のトイレ以外は本当に悩ましいものだった。公共の場では特にそう感じたことを覚えている。

今多くの若い人たちは携帯電話を使い、ゴメリの街を行きかう人々の服装もきちんとしていた。朝の散歩の時にはホテルの近くの保育園に子どもを預

けるお母さん、夕方の散歩ではお迎えの乳母車を押すお父さんの姿をよく見かけた。今回は時間がゆったりと流れ、美しい雪景色の中をたくさん歩けた。

今後共有できることは…

これからの支援や、交流について考えていかねばならない課題は多いと感じた。緊急支援を過ぎた今、受ける側が望んでいるもの、私たちにできる方法を双方できちんと話し合う必要がある。でも医療や教育に携わる人の気持ち、汚染されていてもそこを故郷と感じる人々の気持ち、子どもを育てる母親の気持ち、働く女性の気持ちなどは、民族・言語・国の抱える問題を抜きにしても共有できることは多い。医療支援について今回は貴重な経験をすることができた。私たちもたくさんのことを学び、そしていただいた宿題を日本に持ち帰って皆さんと話し合いながら答えを出さねばならない。

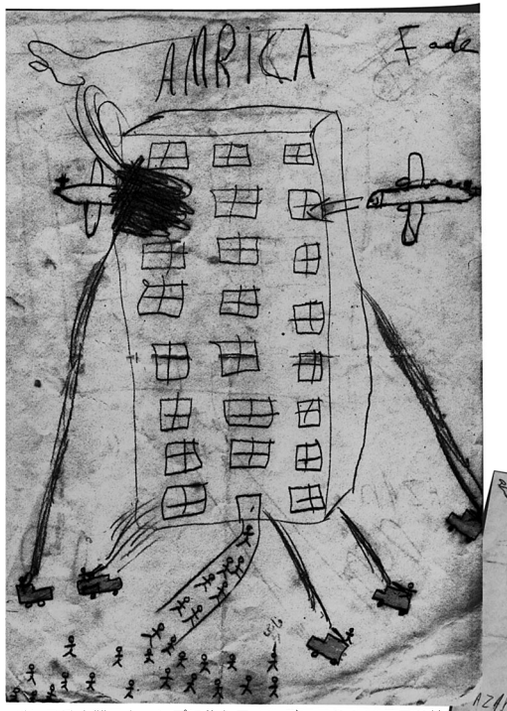
通訳でお世話になったイリーナねこさん、マリーナさんの働きや優しさに今回もたくさん助けられ無事に日程を終えることができた。車を運転してくださった、ふたりのセルゲイさんにも、もちろんお世話になったが特にチェチェルスク病院のセルゲイさんにはいつも申し訳ないくらい辛抱強く待っていてもらった。今回お世話になったすべての皆さんに感謝し帰国報告としたい。

帰りに立ち寄ったウイーンで、ほんのわずかの時間だったが、街を歩くことができた。エゴン・シーレの絵画に出会えたことが忘れられない。

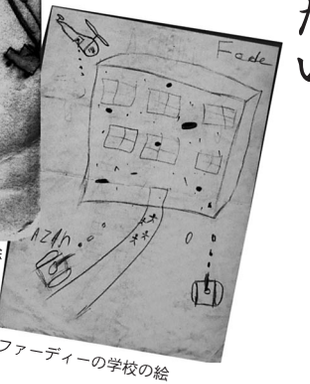
イラク支援

子ども達の生きる姿をしっかりと伝えたい

佐藤　真紀
（ＪＩＭ―ＮＥＴ事務局長）



パレスチナ難民キャンプに住むファーディーの 9.11 テロの絵
『戦争なんて、もうやめて』（大月書店）より



ファーディーの学校の絵

５月、ニューヨークで核非拡散条約（ＮＰＴ）の見直し会議があり、行ってきました。核非拡散条約は、１９７０年にできました。５年ごとに見直し会議を国連で行います。この条約の三本の柱といわれているのは、まず、核軍縮、核保有国も核弾頭を減らしていき、いずれは廃絶に持っていこう、二つ目は、核兵器を拡散させないこと。そして三つ目は核の平和利用ということで、核兵器のかわりに原子力発電ができるというわけです。核のない世界を目指すＮＰＴ体制ですが、アメリカは核兵器の実用化を目指し、そして、北朝鮮はＮＰＴを脱退。イスラエルや、インド、パキスタンは核兵器を保有してＮＰＴに加盟しようとしません。そして、原子力の平和利用といいながら原子力発電の核廃棄物は、地球を汚染するばかりか、わざわざ劣化ウラン弾という兵器に変えられてさらに汚染を広げています。

今回のイラク戦争では、９・11の恐怖を、イラクの核の恐怖にこじつけてしまった。つまりイラクが核を持っていたとしたら、それがテロリストへ渡って、今度は、核を使ったテロが起こる、したがってその前にイラクを攻撃してしまえ、ということになった。イラクが大量破壊兵器の査察を受け入れ、ＩＡＥＡ（国際原子力機関）の査察が再開したにもかかわらず、アメリカは攻撃してしまった。結局、どこにも大量破壊兵器はないわけです。まさに、ＮＰＴ体制の崩壊です。

しかも、平和利用の原子力発電のごみで作られる劣化ウラン弾が今回の戦争でも使われてしまった。多くのイラク人は、直接の戦争で殺され傷つけられ、そして劣化ウラン弾の放射能で数年後にはガンがもっと増えるという危機に直面してます。

この会議は一ヶ月近くニューヨークの国連本部で開催されるので、私も傍聴に行き、ＮＧＯ関係者に、劣化ウラン弾に対してどう考えれば良いのかワークショップで報告しました。今回、ＮＹ州兵の帰還兵にもすでに劣化ウランの被害が現れており、彼らと一緒にワークショップも行いました。そして、何よりもイラクの現状をアメリカ人にも知ってほしいというのがありました。アメリカ人が自分たちのやっていることの傲慢さに気がつかないと、ゆがんだ世界を変えることができません。森住卓さんの写真とイラクの白血病の子どもたちが描いてくれた絵を展示して、できるだけ多くのアメリカ人にも見てもらいたかったのです。

今回のイラク戦争に参加した兵士の何人かには劣化ウランの陽性反応が出ています。私がインタビューしたハーバート・リードさんは、50歳。今まで軍隊や、警察の仕事をやってきました。ものすごくまじめな黒人です。家族を守り、ＮＹを守りそしてアメリカを守るために働いてきました。大量破壊兵器の処理に行ったのに大量破壊兵器など、どこにもありません。彼は、それでもまじめに働きました。サマワの刑務所の改善です。ちゃんとした水を飲めるようにペットボトルを配ったり食事などの衛生面を改善したといいます。

しかし、帰国後、体調が悪いから、

米帰還兵、ハーバート・リードさんと家族

劣化ウランの検査を受けさせてほしい、と軍にお願いしても、取り計らってくれなかったといいます。米政府の対応に不信感を抱いたそうです。

コートニー君（8歳）がパパの絵を描いてくれました。ハーバートさんは、軍服を着た写真を持ってきて「これを見て描くかい」と聞きました。コートニー君はいやだと言いました。

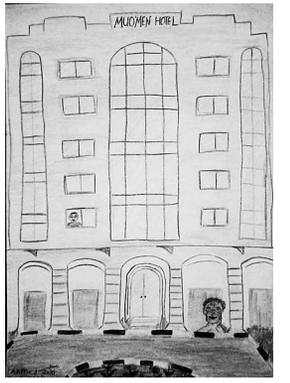
以前は、パパのように大きくなったら軍隊に入るといっていたのを誇らしく感じたそうですが、今では絶対に軍人にはならないように教育しているそうです。6月には退役軍人が国を相手取って裁判を起こすとの事。

私たちはウッドストックの平和団体とも知り合いになり、ジョーンさんという定年退職をした幼稚園の先生に案内してもらい、学校を見学。ここは幼稚園から高校までの一貫教育で、生徒は200人。見た感じも山の中のセミナーハウスという感じ。高校生たちは、劣化ウランの話に真剣に聞き入っていました。一方で米軍は、兵士のリクルートに高校を回っているそうで、ジョーンさんの話では、子どもたちが一方的に軍国教育の中に入れられるのを防ぐことが必要であるとのことでした。

イラクの子どもの描いた絵は好評でした。B2の台紙に絵と作者の写真、そして簡単な説明をつけたものを貼り付けたものを20枚持っていきました。生徒の一人は「とっても悲しい。でも、死んでいく子どもたちがどうしてこういう創造的な絵を描くことができるのか、不思議でなりません。」といっていました。

それから、私は、グランドゼロと呼ばれているWTCの跡地を訪問しました。9・11の英雄たちと書いて、亡くなった人たちの名前が刻まれています。でも、イラクで亡くなった子どもたちはどうでしょう。白血病で死んでいった子どもたちの絵は、私たちにいつも勇気を与えてくれます。それは、「負けないで正しいことをやってください」ということだと思います。私は、グランド・ゼロに子どもたちの絵を何枚か並べてみました。すると警察官がやってきます。私は「これはイラクの子どもです。テロとか戦争の犠牲者の子どもに対しての日本式の儀式です。」というと、警察官も一生懸命子どもの絵を見てくれました。

命に重い・軽いはありません。でもNYにいると当然イラク人よりアメリカ人の兵士の命のほうが重いのです。劣化ウランにしても兵士たちはアメリ



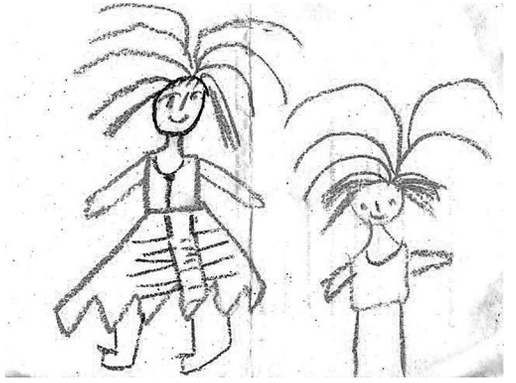
カを訴えていますが、イラク人には誰も訴えることができません。だから私たちは支援を続けているんです。そんなことを話し続けると、アメリカ人の中にもイラクの子どもたちを救いたいと言ってくれた人もいました。

お母さんが作ってくれた髪の毛付きの帽子を被ったハニーン

JIM―NETの医療支援

イラクの白血病の子どもたちを何とかしなくてはいけないと多くの日本人が関心を寄せている理由はやはり、日本が広島・長崎に原子爆弾を落とされたこと。その経験から放射能兵器の廃絶はいわば私たちの使命であると感じる人も少なくありません。多くの人たちがイラクの子どもたちを助けようと立ち上がりました。しかし、これらの支援が効率よく、専門性を持って行われないと効果を挙げるのは難しいのです。

実は経済制裁のころから、「アラブの子どもとなかよくする会」がイラクの支援を行っていました。JVC（日本国際ボランティアセンター）にも一緒になって支援をしてほしいという申し出がありましたが、結局戦争が始まってしまいました。JVCでは、井下俊医師を戦後まもなくの段階で派遣し状況を調査しました。本格的な白血病の子どもたちの援助を始めたのは2003年8月のことでした。井下さんも、その当時は、病院で働いていたので、そうも時間が割けるわけではありませんでした。G―CSF剤を日本から送ろうという話が出たときに、JVCではイラク国内でそれを正しく使われていることを誰がモニターするのかという意


ハニーンが描いたお母さんと買い物に行く絵
残念ながらハニーンはイラクへ帰国した後、亡くなりました。

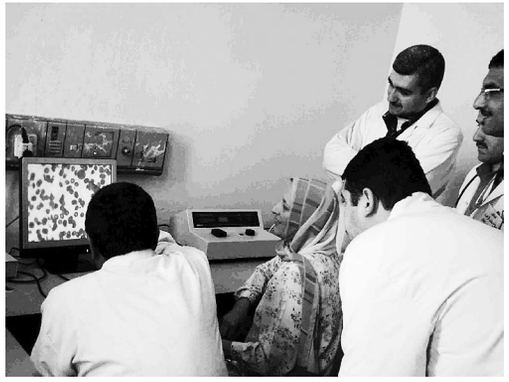
見が出ました。「イラクのドクターに聞いてみよう」「イラクのドクターは何でもほしいというに決まっている」。結局ＪＶＣにはＧ―ＣＳＦ剤を送れる専門性がないのであきらめざるをえませんでした。薬は日本に余っているのに。そのときの悔しい思い。そこで、私が手にしたのは英語学習の雑誌に出ていた鎌田實先生でした。ＪＣＦが10年チェルノブイリの支援をしてきたという実績を是非イラク支援に生かしてほしいとお願いにうかがったのが昨年の5月のこと。

8月と今年の2月には隣のヨルダンでイラクの医師を招いての打ち合わせ会議を開きました。井下医師が2月からヨルダンに滞在してくれているので、より専門性の高い議論ができました。私たちは、今、足りない抗がん剤を届ける一方で、感染症対策に力をいれ、薬が効果的に効くことを狙っています。看護師のトレーニングもヨルダンのキングフセインがんセンターで開始。2名の看護師がトレーニングを受けています。

そして、もうひとつ、イブラヒム先生の算数教室を忘れてはいけません。彼は、バスラの出身ですが、白血病で妻を今年の1月に亡くしました。残された3人の子どもたち。未熟児で生まれて来た双子はまだ1歳にもなっていませんでした。3歳のファートマもリンパ腺が腫れています。こんな状態でイラクに戻っても、仕事もなく子供たちもどうなるかわかりません。失意のどん底のイブラヒムをＪＩＭ―ＮＥＴの事務所にしばらくいてもらうことにしました。そして、彼に、算数をイラクから長期治療でヨルダンに来ている子どもたちに教えるようにお願いしたのです。

3ヶ月が過ぎて、イブラヒムはすっかり元気になりました。そして、病気とたたかっている子どもたちに算数を教えています。もしかしたら明日死んでしまうかもしれない子どもたちがとっても嬉しそうなのです。イブラヒム先生はきっと子どもたちや家族たちにとってもいい相談相手になっているでしょう。ＪＩＭ―ＮＥＴの仕事のひとつは白血病の子どもたちの生きている姿、あるいは生きていた姿をしっかりと伝えていくことです。

現地からの写真
支援顕微鏡活用！

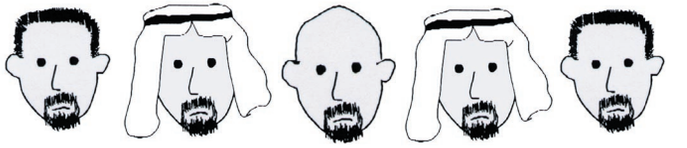


イラクの白血病支援プログラムが動き出した。経済制裁と戦闘によって悲惨な状況にあるイラクでは、血液バンクは機能せず、感染予防のためのうがいや手洗いもされていない。抗がん剤や抗生物質による強化療法に加えて感染症対策の第一歩を踏み出している。バグダッドの二病院から看護師二名が、ヨルダンのキングフセインがんセンターで感染症対策の研修を受けている。また、南部バスラの病院に消毒剤を贈った。

昨年、ファルージャの戦闘が激化する直前にバグダッドのセントラル教育病院に贈った顕微鏡を、ドクター達が使っている写真がメールで送られてきた。当初、ディスカッション顕微鏡をとリクエストがあったが、モニター表示の方が、大勢で見ることができるとモニター付き光学顕微鏡を送った。ドクターたちが熱心にモニターを見ている写真を見て、これからもいっそう白血病の診断に役立ててほしいと願っている。

バグダッドのセントル教育病院・教育福祉病院へ各一台ずつモニター付き光学顕微鏡を「通販生活・イラク支援」からの助成により支援しました。

アンマン便り



どうでもいい

井下　俊（JIM-NET ヨルダン駐在）

イスラムの国で気に入っているもののひとつに〝アザーン〟がある。モスクから一日5回流れてくるイスラムのお祈りの呼びかけの歌だ。もちろん意味はわからないのだが、「皆でお祈りしましょう」と呼びかけているらしい。アザーンは、かつて日本の風景にあったお寺の鐘の音のようなものである。パレスチナにいた時は、アパートがモスクの隣であったため大音響で流れるアザーンに多少閉口していたのだが、今のアパートは適度にモスクから離れており、さらにアンマンは丘陵地帯で空気が多少重いせいもあろうか、アザーンの歌に程よいエコーがかかる。眠れない時、未明に聞くアザーンは最高の音楽である。

そんなアザーンを聞きながら沈思黙考すると、最近「どうでもいい」というフレーズが聞こえるようになった。アザーンとともに「ドーーォーーデモ、イイッ」と頭の中で唱えているのだ。結婚してなくてもどうでもいい、髪の毛が薄くなってもどうでもいい、ご飯食べなくてもどうでもいい、シャワー浴びなくてもどうでもいい、といった感じだ。こう書くと、自暴自棄に陥った汚いオヤジの逆切れ言葉と感じられるかもしれない。幾分そういった趣がないでもない。

私は医者である。医者が正しい医療を行おうとする場合、あるいは論文を書く場合、その際求められるのは「自分を消す」ことである。普遍性が求められる自然科学分野では、森羅万象の真理が重要であり、それに関わる一個人の心的感情は重要ではない。むしろ、個人的な見解が介入することで真理は見えなくなってしまう。ゆえに医者が医療行為を行う場合、あるいは医学論文を書こうとする場合、何が実際に生じた現象（客観的事実）であり何が個人的見解（主観）か厳密に認識し、真実は何かをひたすら追及する。客観的事実を歪曲しかねない個人的見解は極力排除する必要がある。言い換えると「自分を消す」作業が必要なのである。自分自身の主観的見解など絶対的真理のまえでは「どうでもいい」のである。こういった態度を〝detachment（超然）〟と呼ぶらしい。

医者になって15年余り、日々の業務の中でそういった訓練を受けてきたせいであろうか、医療以外の領域でも自分を消す作業を行い、その結果「どうでもいい」と感じるものが多くなってきている。お金がなくてもどうでもいい、尊敬などされなくてもどうでもいい、将来不安定でもどうでもいい、女性にもてなく…てもどうでもいい、といった具合である。

しかしその一方で、「どうでもいいわけがない」と感じることも増えてきている。それは、現在世界で生じているさまざまな事象に対してである。イラクの治安が悪くてもどうでもいいわけではない。イラクの白血病治療がうまくいかなくてもどうでもいいわけではない。自衛隊がイラクに駐留し続けてもどうでもいいわけではない。憲法が改変されてもどうでもいいわけではない。

自分の心の中で「自分のこと」を消していくだけ、「他者のこと」が占める比重が増していくのであろうか。あるいは主観的見解を消していくことで絶対的真理が見え始めたためであろうか。自分の中で自身の存在が希薄化するとともに、益々「世界」のことが気になりはじめ、何とかしなければという思いが強くなってきている。

というわけで、もしイスラムの国を訪問することがあれば、アザーンに合わせて「ドーーーオーーーーデモ、イイッ！」「ケッコンーーーーシナーーァウーーーークテモーーーォーーーー、ドーーーォーーーーデモイッ！」などと唱えてみて下さい。新しい世界が開かれること請け合いです。

2005年度

理事会報告

運営基盤を整え、活動を展開

5月14日（土）、松本市中央公民館にて、２００５年度ＪＣＦ理事会を開催した。参加者は、出席理事９名、委任状出席８名、オブザーバー７名、事務局２名、阿木理事の司会で進行した。

議事

一、04年度活動報告

第76次から79次、３回の訪問団の派遣によって、チェルノブイリ医療支援を行った。新生児支援と児童健康診断については、松澤重行先生から報告していただいた。スタディツアーは９名の参加で、本橋理事のサンクトペテルブルグでの写真展にも合流した。イラクの白血病支援のために２回、隣国のヨルダンで検討会議を開き、増白血球因子やモニター付き顕微鏡をバグダッドの２病院に贈った。国内事業として、セミナー「ベラルーシの食卓」「チェブラーシカのクリスマス」とＪＣＦ講座「イラクの医療事情」を開催し、広報誌「グランド・ゼロ」を４回発行した。

二、04年度決算報告

年度当初、イラク支援の項目立てをしていなかったが、取り組みが始まり、鎌田理事長の精力的な講演会での呼びかけで、たくさんの寄付が寄せられた。チェルノブイリ（10）ドリームズの院内学級支援のお金は、ベラルーシで新学期が始まる９月に手渡すため、繰り越されている。イラクの血液成分分析器購入代金などは、現地購入の手配が進められている。

三、会計監査報告

理事会に先立ち、９日に吉永監事に、14日横山監事に監査をしていただいた。イラク支援の寄付が多かったが、チェルノブイリ寄付が減っている。健全な会計処理がされている。

四、05年度活動計画と予算案

チェルノブイリの小児白血病支援と新生児支援を継続していく。イラク白血病支援はアンマンに井下俊医師をＪＣＦとして派遣する。ＪＩＭ―ＮＥＴの事務局長として佐藤真紀さんが専従で関わり、強化していく。松本では「戦後60年を問う会・まつもと」として、中央公民館とＪＣＦが呼びかけ、年間を通して、戦争・環境・いのちについて学んでいく。

予算案は、イラク支援に１２７５万円を含んだ総額４０６１万９４５１円が可決された。

五、チェルノブイリ事故から20年、ＪＣＦ設立15周年記念事業について

ＪＣＦチェルノブイリ支援活動から学んだことを報告し、未来に向けてメッセージを発信するイベントを行う。２００６年４月８日から５月７日まで、松本市美術館・市民芸術館でチェルノブイリ・イラクの写真展と講演・報告会を行う。東京・京都でも開催する。

六、法人格取得

これまで、継続審議されてきた法人格について、経営基盤の強化のために取得が必要になっていると提案され、特に活動目的と名称が討議された。

▼名称

・イラク支援にシフトしつつある中で、「チェルノブイリ」という名称では、説明が必要だ。

・チェルノブイリは20世紀の大きな負の遺産である。忘れないために、核にノーと言い続けることも含めて、今までの名称を残す。

・ＪＣＦの内部でも一般の方たちにもＪＣＦの名前がなじんでいる。

以上、賛否両論が活発に闘わされたが、決定打が出ず、当分「ＪＣＦ／日本チェルノブイリ連帯基金」で、活動の推移を見ながら、名称を考えていくことになった。

来年の記念事業と法人申請については、ユニークな意見が噴出し、理事会はおおいに盛り上がった。ＪＣＦの運営を支えてくださる皆さんからの活力で、これまで15年のＪＣＦがあり、これからも続いていくだろう。今、イラク医療支援が始まり、ＪＣＦは新たな展開の時を迎えている。来年の大きな記念事業にも、ぜひ皆さんのご協力をお願いします。

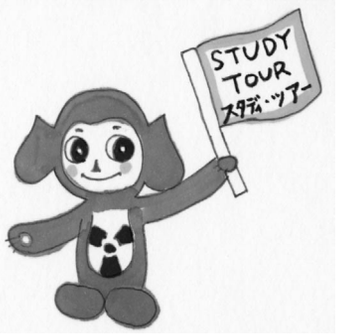
2004年度決算報告

科目	今年度決算額
収入の部	
1. 繰越金	5,440,587
2. 会費	1,180,000
3. 寄付金	18,344,260
4. 助成金	7,174,700
5. 事業部収入	3,018,790
6. 雑収入	260,139
小計	35,418,476
支出の部	
1. ＣＩＳ事業費	6,631,354
2. イラク支援	2,778,387
3. 国内事業費	2,238,235
4. スタディツアー	1,919,612
5. 人件費	7,869,650
6. 支払地代家賃	1,260,000
7. 水道光熱費	478,556
8. 修繕費	40,290
9. 賃貸料	148,675
10. 通信費	613,545
11. 備品費	121,980
12. 国内旅費交通費	1,119,135
13. パソコン保守	46,205
14. 事務用品費	51,675
15. 消耗品費	127,220
16. 荷造り運賃費	64,320
17. 交際接待費	65,746
18. 雑費	34,470
小計	25,609,055

収入決算総額	35,418,476 円
支出決算総額	25,609,055 円
繰越金	9,809,421 円

２００５年スタディツアー

新しいツアーを企画しました！



日程	8 月 26 日～ 9 月 3 日
訪問先	ベラルーシ共和国ゴメリ州
参加費	約 20 万円（食事代含む）
締切	7 月 20 日
申込先	ＪＣＦ（0263-46-4218）

☆学生による機器メンテナンス実習

廣浦学さん（愛知県　東海医療工学専門学校講師）のプラン

これまで、中古医療機器を日本から送ってきました。昨年、中古はいらないという通達があり、メディカルエンジニアの制度もない国での活動は難しいと感じていた。「チェルノブイリ救援・中部」がウクライナの医療専門学校で教えているということも聞き、今、養成学校で教えている立場もあり、学生を連れていきたい。現地の養成施設へのアプローチを考えた。既に学生達は、電気工事士、ボイラー管理士のライセンスを持っている。既に18名参加希望がある。学生達が実務について2、3年経ってからこの経験が生きていけばいいと言うところにスタディツアーの主意があります。僕もボランティア活動をしながら、現地の医療機関で教えることができれば思っていますが、まだ、力が足りません。しかし、名古屋地区では、さまざまな医療機器が既に集まってきていますので、ＪＣＦに限らず、他のＮＧＯでも機器を生かしていただけれるように呼びかけていきたいと思っています。血小板除去フィルターが３００箱集まってきています。４０００万円相当です。鋼製小物も集まっています。中古だけでなく、いいものもいっぱいあります。松本より人口が多いので、いっぱい出てきます。イラク関係でも「セイブ・イラクチルドレン・名古屋」がたくさん集めています。

今回スタディツアーで感性豊かな若者を連れて行きますので、いつかその成果が現れればいいと思います。

廣浦さんは医療機器の問題にずっと関わってきました。電圧が違ったり、色々な事で、送った医療機器が使われなくなってしまうことがＮＧＯ活動では一番問題になります。廣浦さんはその点をずっとカバーしてきたので、中古であっても使われてきました。

今回学生達を連れていくということは、また、新たな段階に入ったといえます。

☆病室にひまわり畑を作ろう

カ丸邦子さんのプラン

ベラルーシに行き始めて、私たちができることというと、何かお土産を持っていって子供達を喜ばせることが一番手っ取り早い方法です。でも、子供達が自分達で作って「できた！」と感性の喜びを味わって貰えたらと考えました。事務局でも賛成してくれたので、環境センターの壁にひまわり畑を作ろうと思っています。小さな事を積み重ねていって完成する喜びを味わってほしい。もちろん子供達の健康を気遣いながらやらなければなりません。以前ターニャから「いつも孤独と不安の中にいる」と手紙をもらいました。どんなにいい環境の中にいても病気の子供達は不安なんだろうと思います。できるだけ笑ってもらおう。できるだけ、できたんだよ、と思ってもらおうと、今回はそれだけで望んでみたいと思っています。

支援する者の満足だけではなく、一緒に作業する喜びが人間の成長にもいい影響を及ぼすと思います。宜しくお願いいたします。

母達の願い
何とか続けたい「健康診断」

武田裕子
（ナージャの輪）

ＪＣＦ事務局からお誘いがあり、理事会にオブザーバー参加させていただいた。３年ほど前にも一度、参加させていただいた。確か２月頃、まだ雪がある松本だった記憶がある。ずいぶん、前だったような気もする。

99年、ＪＣＯ事故での屋内待機以来、不安そうに見つめていた我が子の気持ちに後押しされながら、私の身の丈ほどでできることをやってきたつもりでいた。あっという間の６年間。小学生だった子どもたちも、とうに私の身長をこえた。

昨年、東海村の隣のこの町に住むことを決め、家を建てた。そして同じ頃、東海村の学校に講師として勤務することになった。誰が戒めたわけでもないのに、やっぱり、私の素直な思いを伝える場は自然に少なくなった。

この３月、「ナージャの風」の仲間、Ｑちゃんから久しぶりに連絡があった。高知からのＱちゃんのお友達とその学生さん達が東海村にいらっしゃるとのこと。皆さんと一緒に、スライドを見た。あんなに一生懸命、風のみんなと作ったスライドなのに、ずっと伝えること、お休みしていた。忘れることはないけれど、考える機会がないと、薄れていく思いってあるんだなぁ、と感じた。

『「知る」ことそして「伝えること」から頂くありがたさ』、そうＱちゃんは言ってたけど、ほんとだね、スライドがつなげてくれた思いに、私もありがとうの気持ちでいっぱいでした。Ｑちゃん、あのあと、我が家で近所の友達とスライドを見ましたよ。感謝しています、ゆっくりスライドをつなげていきたいな、とまた気づかせてくれたことに。

今回、松本行きを決めたのは、なつかしい皆さんとお会いし、また考える場を頂きたかったから。

折しも来年はチェルノブイリ事故から20年、ＪＣＦの活動は15年目を迎えるという。ＪＣＦの活動も、世界の子どもたちの命を守る活動へと広がってきている。イラクの子どもたちへの支援活動を続けている、日本国際ボランティアセンターの佐藤氏のお話があった。いつだって大人たちの起こしたあやまちの裏には、罪のない子どもたちの尊い命を奪い続けている悲劇がある事を、忘れてはならないと思う。

今、東海村では、ＪＣＯ事故後の健康診断をもうそろそろやめてもいいのでは、という地元の声も上がっている。せめて基本となるこの検査だけは何とか続けていきたいと、久しぶり「ナージャの輪」で集まり、知恵を出し合おうと連絡を取り合った。

子どもたちの成長を、健康診断の「お守り」と一緒に見守っていきたいと願う母の思い、小さな声でもしっかりと伝えたい。

ＪＣＦの皆さん、理事会に参加させていただき、活動をずっと続けてこられた皆さんから、たくさんの考える場を頂いたことに感謝しています。

来年の記念事業では、少しでもお役にたてることがあるとうれしいです。

連載随筆

嘆きのかなた

宮尾彰

NO.20

写真提供　本橋成一

「私は街に出て花を買ふと、妻の墓を訪れようと思った。」

原民喜（一九〇五―一九五一）の代表作『夏の花』の書出しです。この一節の後には、原爆投下直後の広島が恐ろしいほど静かな筆致で描かれています。

作家は被爆の約一年前、数年の看病の果てに妻貞恵を結核で亡くしています。傷心の癒えぬまま帰省した郷里で、彼は「アカクヤケタダレタニンゲンノ死体」や「カハリハテタスガタノ細イ眼」を目撃することになるのでした。

それ以来、彼の生を死者たちの嘆きの声が満たしてしまったようです。

――僕はあの無数の死を目撃しながら、絶えず心に叫びつづけてゐたのだ。これらは『死』ではない。このやうに慌ただしい無造作な死が『死』と言へるだらうか、と。それに較べれば、お前の死はもっと重々しく、一つの纏りのある世界として、とにかく、静かな屋根の下でゆっくり営まれたのだ。

知己にとっては、彼が妻の死後も生き続けたこと自体が一つの奇跡でした。幼少の頃から暗い夢や幻に親しんだ彼に、剥き出しの現実としての死が突きつけられたのです。過酷にも、彼は妻の死を経て初めて「生の現場」に立ち返ることを余儀なくされました。それまで彼は、妻を通してかろうじて社会とつながっていたのであり、日常を病的な寡黙の内に過ごしていた彼が、一人で生活してゆくことなどまったく想像できませんでした。

写真提供　本橋成一

飢え渇いた小さな身体を引きずりながら、住む部屋を転々と変え、僅かな原稿料で生活をつなぐ彼の言葉は、その肉体とともに澄み切った危うさを増してゆきます。やがてそこに、小説でも詩でもない、一つの音楽が生まれました。

――一人の人間に一つの調子が湧くとき、すぐもう一人の人間にその調子がひびいてゆくこと、僕がふと考へてゐるのはこのことなのだろうか。

――一つの嘆きは無数の嘆きと結びつく。無数の嘆きは一つの嘆きと鳴りひびく。僕は僕に鳴りひびく。鳴りひびく。鳴りひびく。嘆きは僕と結びつく。僕は結びつく。僕は無数と結びつく。鳴りひびく。無数の嘆きは鳴りひびく。鳴りひびく。一つの嘆きは鳴りひびく。鳴りひびく。一つの嘆きは無数のやうに。結びつく、一つの嘆きは無数のやうに。一つのやうに、無数のやうに。鳴りひびく。結びつく。嘆きは嘆きに鳴りひびく。嘆きのかなた、嘆きのかなたまで、鳴りひびき、結びつき、一つのやうに、無数のやうに……。

彼がその身を鉄路に横たえて死者たちの嘆きのかなたへと去って行ったのは、この作品『鎮魂歌』執筆の翌年、妻の死から七年後の春のことでした。

朝鮮半島を二つに引き裂いた戦争が、彼の切なる祈りを踏みにじったのです。今年もまた、夏がめぐって来ます。死者たちの嘆きを連れて。

ジーマの

ロシア小話

◆ある男は銀行の窓口で立ち、何かをカバンの中で探す。銀行の係りは、
「他のお客さんが待っていますので、お客さんがお金を落とすか、お金を預けるか、早く決めていただきたいですが」
「勿論お金を落とすよ。だが、畜生。俺はピストルをどこへしまったのか…」

◆アメリカの社会学調査から、自分の靴下をタンスで乱れた状態で抱える男性は、靴下の整理がちゃんとしている男性より、セックスをする回数が３倍程多いことが分かりました。
しかし、自分の靴下をおしげなく手放したからと言って、女性があなたのベッドにどんどん入ることになると思うことが間違いだ。

◆「イケてる男が金属の飾りを身につけるのは、どうだろう？」

「はい。髪にシルバーを、ポケットにゴールドを、パンツの中にスチールをつければ完璧です」

◆父は、夫婦喧嘩で落ち込んでいる、結婚したばかりの息子を慰めている。
「全ての若いカップルは喧嘩するものさ。僕たちも初めは、母さんとのいさかいが一杯あった。僕らはわからなかったのさ、僕が誤解していたことを」

◆テレビ局への視聴者からの手紙から
「番組の放送中、ニュースの字幕情報を出さないでいただきたい。こちらの婆は、それをカラオケとしてとらえ、歌っているからだ」

――ストレリツォフ・ドミートリさんよりのアネクドート―――

АНЕКДОТ

◆В банке мужик стоит около кассы и что-то ищет в сумке. Кассир обращается к нему:
- Не задерживайте очередь, решайте скорее, что вы хотите: взять деньги или положить?
- Ну, конечно, взять! Черт возьми, куда я засунул свой пистолет?

◆Американские социологи доказали, что мужчины, у которых носки валяются в шкафу в беспорядке, занимаются сексом в три раза больше, чем мужчины, у которых носки аккуратно сложены. Но не надо делать из этого вывода, что если вы разбросаете все свои носки, то женщины начнут лезть к вам в постель.

◆Может ли настоящий мужчина носить драгметаллы? Да. Вполне уместны серебро в волосах, золото в кармане и сталь в трусах.

◆Все молодые пары ссорятся, - успокаивает отец своего недавно женившегося сына. - У нас с твоей матерью тоже в начале были два или три очень серьезных разногласия, пока мы не убедились, как я глубоко заблуждался.

◆Письмо на телевидение.
- Пожалуйста, не пускайте больше во время передачи _бегущую строку_ новостей. Моя бабушка думает, что это караокэ, и поет.

モスクワ便り

この時期、11 年生には＜熱い季節＞になる。5 月下旬、学校では＜最期の鐘＞という式が行われる。講堂には、全生徒、卒業生の保護者、先生、この中には、卒業生が 1 年生の時習った先生も含まれる。11 学年の学生達は（正しくは 3 クラス）、早くから歌や学校生活を題材にしたドラマのコンサートの準備にかかり、先生達についての詩を読む。それらはとても感動的で先生や保護者は泣き、時々舞台に直接出演しているかのように泣いている（確かに少女達だけですが）。最期に、小さな一学年生達が卒業生に学業の終わりをお祝いする。その後、最も背の高い卒業生が、一番小さな一年生の女の子を肩に乗せて講堂を歩き、女の子が鐘を鳴らす。―それは、卒業生にとってまさに最期の鐘なのです…。この後、学校では、卒業試験が行われます。

学校の卒業試験が終わると、7 月、大学の入学試験が始まります。私は 10 学年後の卒業試験を一人頑張ったことを良く覚えています（今は学校は 11 年学びます）。この時は、すべての基礎的な科目をやらなければなりません。―文字通り作文、数学、他は（物理・化学・歴史・英語等々）口頭です。今では、それらはずっと楽になりました。作文と数学の筆記は必須です。残りの科目から希望で 3 科目を選択し、受けます。子ども達は、大学受験の必須科目で、しかもやさしくて準備勉強しなくてもいいような科目を選ぼうとします。

例えば、試験に体育や世界芸術文化を選び、化学や物理は選びません。

試験期間中は、先生達は、あらゆるフォローをして、子ども達を助けます。だから何も誰も怖がらずに、基本的に心配はありません。6 月 20 日、すべての学校で卒業の夕べが行われます。初めに卒業証書が手渡され、教師、保護者、生徒が出演します。それから、ご馳走が並んだテーブルが片づけられ、朝 6 時までダンスです。いくつかの学校では、学校での卒業の夕べのパーティの後、みんなでディーゼル船に乗って朝までモスクワ川を遊覧します。これで幼年時代の終わりです。前へ！！大学の入学試験と大人への人生が始まります。

イリーナ・ニコラエワ（ＪＣＦモスクワ事務局）

ベラルーシの食卓

丘に広がる白い花

ソーシ河に氷塊がゆっくり流れ、早春の陽が注ぎ始めた。広い河川敷いっぱいに雪解け水が溢れる。

乾いた明るい空気の中で、畑地に人影が現れる。小さな種用に蓄えられた小芋を、畝に添って植えつけていく。冬、堆肥をすきこんだ地味豊かな大地が、やわらかな芽吹きを支える。

ベラルーシのふんだんなジャガイモ料理はこうして生まれてくる。

日本でも、男爵やメークインだけでなく、ジャガイモの品種が増えてきた。「ベラルーシ　ジャガイモ料理 500 種」を順に紹介します。まずは、シンプルな一品。素材のおいしさでいただきましょう。ちなみに私が一番美味しいと感じているジャガイモは“アンドレータ”、“北あかり”に食感が似ています。

＜材料＞

ジャガイモ　10 個、オイル　大さじ 5、香草、塩

＜作り方＞

1. ジャガイモの小口切りを冷たい水につける。
2. 容器にとって、水気をとる。
3. ジャガイモに塩をし、オイルを熱した鍋に 5 ㎝以下で並べる。
4. 全体に火が通るまで炒めて、火を止める前に少しオイルを注ぐ。
5. 塩少々と香草のみじん切りを入れて、交ぜる。

好みで、別にタマネギのスライスを炒めて、ジャガイモに交ぜる。

振替用紙のメッセージから

◎地道な活動の一助に使っていただければ幸甚です。（東京都）

◎いつも絵葉書のご連絡ありがとうございます。3月11日バグダッドから2人のお医者さんが長崎で研修なさるお知らせうれしいです。（千葉県）

◎今年もまた4月がめぐって来ました。祈りをこめて。心ばかりをお届けします。（長野県）

◎少額で申し訳ございません。子供達の幸福を祈っております。（栃木県）

◎一生懸命書いたクリスマスカードに感激しています。思う気持ちの何分の一かの金額を送ります。（東京都）

◎『グランドゼロ』の吉田久美子さんの記事を読んでとても感動しました。あのかわいい「チェブラーシカ」が私たちに届くまでにこんなに苦労があったのですね。吉田さんに心からエールを送ります。（長野県）

◎モスクワ便りありがとうございます。3月8日「婦人の日」女性たちが自分の権利擁護のために革命的に頑張ったのですね。これからも頑張る子に命を！（京都府）

◎困難をのりこえよう。応援します。（千葉県）

◎無限の可能性を秘めた子供たちの未来のために。（京都府）

◎集団自殺や少しのトラブルで人の命を簡単に絶ってしまう人達に60年たってもまだあの日の記憶と共に生きていかなければならない人達、生きたくても生きられないチェルノブイリやイラクの子どもたちのことを考えてほしい。（京都府）

◎この冬はいただきものの、いのちに感謝〳〵の毎日でした。（石川県）

◎薬剤師です。鎌田實先生のように志を持ち活躍したいのですが、色々考えてみたいと思います。（静岡県）

◎少しでも早くイラクに平和が訪れますよう願っています。（東京都）

◎ピースカード（こころに花をグランドゼロピースミッション）募金です。イラク支援に少しですが役立てて下さい。この4月小学6年になりました。都城であった生涯学習フェスティバルと地震ゼロ講演会で国際交流課（市役所）の方が協力して下さいました。4月29日NHK宮崎の公開生放送で鎌田先生のお話が伺えるのが楽しみ。新富町でお会いしましょうね。先生！（宮崎県）

◎子ども達の未来が希望にみちた幸せな時であります様に願っています。（愛知県）

◎4月29日鎌田先生のラジオ出演を楽しみにしております。先生はじめ皆様のがんばりに感謝申し上げます。（千葉県）

◎今回もわずかですが、送らせていただきます。私個人ではとてもできないことをやっていることに感謝します。頑張って下さい。（長野県）

◎事故のニュースばかりですが、ドリームの叶うのを祈って。（岐阜県）

◎『チェルノブイリ19年京都の集い』で参加者より集めたチェルノブイリの子どもたちへのカンパです。（京都府）

◎イラクの治安が日々悪化しています。何とか子どもの命が少しでも助けられればと思っています。平和な国にいて、何もできないのが悔しいです。（東京都）

◎チェルノブイリの病院の子どもさんから（ニューイヤーカードか）クリスマスカードが届きました。とても心があたたまる思いがしました。これからも長い活動を続けられるように支援させて頂こうと思います。（長野県）

◎夫が亡くなり12年経ちました。私のできますことは、ほんの気持ちですけど、イラクの子ども達の幸せを念じつつ協力したいと思います。（長野県）

◎子供達が希望をもって生きられるように。（長野県）

◎少額ですが、ずっと続けていきたいと思います。（神奈川県）

◎グランドゼロありがとうございました。ゆっくり読ませていただきます。（東京都）

◎いずれでも必要なものにお使い下さい。週刊朝日の『がんばらないけどあきらめない』そして新刊の『それでもやっぱりがんばらない』読ませて頂きました。大病を経た私には先生の想い最高と思われます。（岡山県）

Chernobyl 10 Dreams

チェルノブイリの夢へ 10 年間の「ありがとう」
10 年間つむいだ夢が、さらに多くのこども達へとつながります。

子ども達の夢と未来をつないで

チェルノブイリの子ども達へ、イラクの子ども達へ

1991 年より支援を続けたベラルーシの経済状態はわずかに回復の兆しを見せ、医療事情も回復しはじめました。しかし私達は途方もない汚染地で暮らす子ども達から目を離すことはできません。現地購入できない医薬品と、長期入院の子ども達にための院内学級をサポートします。

湾岸戦争以後に白血病が急増しているイラク。2002 年まで続けられた経済制裁により物資が不足する中に、今回の戦争により、極端な医薬品不足に陥っています。子ども達に白血病治療に必要なサポートが急がれます。

A コース	白血病治療支援・チェルノブイリ
B コース	白血病治療支援・イラク
C コース	院内学級サポート
郵便振替口座番号	00520-6-10993
加入者名	チェルノブイリ (10) ドリームズ 10

～ＪＣＦ募金のお願い～

ＪＣＦ会費振込口座

賛助会費	5,000 円
特別賛助会費	30,000 円
事務局ガンバレ会費	10,000 円
郵便振替口座番号	**00560-5-43020**
加入者名	**日本チェルノブイリ連帯基金**

＊会費・寄付の入金時には入金確認の礼状はがきを差し上げます。はがき不要の方は振り込み用紙の通信欄でご連絡下さい。また領収書の必要な方もその旨お書き下さい。

ＪＣＦ／イラク支援振込口座

感染予防のための専門看護師トレーニング費用、消毒薬の購入他

郵便振替口座番号	**00520-0-81078**
加入者名	**ＪＣＦ／イラク支援**

2004 年度「チェルノブイリ（10）ドリームズ 9」ご報告
たくさんの応援をありがとうございました！

Aコース　医師研修支援（目標額：50 万円）　**1,323,100 円**
医師 2 名が徳島日赤病院で研修を受け、5 月末に帰国しました。
Bコース　院内学級サポート（目標額：10 万円）　**338,900 円**
2005 年 9 月からの新学期に教師雇用資金として贈ります。
Cコース　小児白血病治療支援（目標額：380 万円）**3,722,134 円**
環境センター・小児血液がんセンターの移植支援
寄付者数　274 名　総額 5,384,134 円

会員さんを訪ねて

フストレーチャ：出会い

ВСТРЕЧА

たぁくらたぁの堰作り

みなさんは「たぁくらたぁ」という言葉をご存じですか？

長野県の各地に残る方言で、できもしないような話、またその話をする当人。「たあくらたあこいてる」（訳も分からないことを言ってる）と使うらしい。もとのことばは［田蔵田（たくらだ）］からきているといい、広辞苑によると、「田蔵田は麝香鹿（じゃこうじか）に似た獣で、人が狩る時、飛び出して来て殺されるという、自分に関係のないことで愚かにも死ぬ者。ばかもの。うつけもの」古語の「タブル（気が狂う）」と同源であるという説もあるらしい。

私はこの「たぁくらたぁ」という言葉の響きが好きです。「ばっかだなぁ―」と言いながら、でも嘲りのニュアンスはなく、何か暖かくて、優しい響きさえあります。

その「たぁくらたぁ」をタイトルに、長野県の川中島発〈産直泥付きマガジン〉を発行している野池元基さんという方がいます。野池さんからは以前ＪＣＦ講座で、沖縄・白保の珊瑚礁についてお話を聞き、美味しい手打ちうどんの講習会をして頂きました。

今回は川中島の野池さんのお宅にお邪魔しました。

「ＪＲ川中島駅からすぐ」の言葉通り、駅の高架橋沿いに歩いていくとすぐ目の前のお宅の二階で、ニコニコ手を振る野池さんのおひげの顔が見えました。にわか雨を駆け抜けて、お宅にお邪魔してお話しを聞きました。

野池さんは20代の初め、当時ヒッピーと呼ばれた、カウンタカルチャーの人たちが沖縄や奄美の石油備蓄基地や観光開発に反対していることに興味があって、一番南の西表島に渡りました。

当時、石油備蓄基地だけでなく原発の再処理工場というようなエネルギー政策のツケが、はじっこの島に押しつけられようとしていたのです。その時沖縄の新聞で、石垣島白保の空港建設のための埋め立てに反対して、サンゴの海を守る運動の記事を読み、それがきっかけで、それからずーっと石垣島の珊瑚礁を守る運動に関わることになるのです。

82年当時、白保のことは沖縄の新聞では取り上げられていたのですが、本土ではまったく取り上げられていませんでした。そこで自分が見てきたことを、日本自然保護協会の機関誌に書きました。そこから関わりが本格的になり、運動に巻き込まれるかたちで、通い続けるようになります。僕が「朝日ジャーナル」に書いた白保のレポートが全国的な報告としては最初のものだったと思いますが、84年頃からいろいろなところで取り上げられるようになり、国会やマスコミを巻き込んで運動が盛り上がります。88年には国際自然保護連合が反対決議を出し、それまで黙殺してきた環境省からも埋め立てにクレームがつき、埋め立て計画は中止になります。しかし自分達の生活の場の海を守ろうと出発した自然保護運動も、次第に政治的なものになり、さまざまな人が私的な思惑（おもわく）で関わるようになると、うんざりするようなことも多くなり、島の人とゆっくり話す時間もなくなってしまったのです。

白保の人がこんなに本気で珊瑚礁や海を守ろうとしているのは、いったい何だろう、自分が20代の青春を全部かけた白保問題について、もう一度現地の人から話を聞いてまとめ、それを本に書くことを思い立ちます。それまで住んでいた東京を引き払い、荷物を郷里、川中島に置き、身ひとつで白保に通い、現地に居候してお年寄りに取材して１９９０年、本にまとめたのです。それが『サンゴの海に生きる』（農文協）です。

丹精のりんご畑で

ある70過ぎのオバーは戦時中を述懐してこう語ったといいます。

「イモもない。米もなかった。ただあの海の魚でよ、子どもをひもじい思いをさせないで生かしてきたよ。どこにすがっても命は助からんが、海にすがれば生きれる。〝いざ〟というときの食料さ。この海はいくらのお金にも替えられない。命をかけても空港はつくらせないよ」（『サンゴの海に生きる』より）

こういうオバーやオジーが海の大切さを住民に繰り返し繰り返し語りかけ、部落ぐるみの反対運動が、みんなの「命つぎの海」を守ったのです。自分たちの生きていく基盤は自分たちの暮らしている環境にある、それを大切にすることの意味を再認識して、野池さんは川中島に戻ります。

ふるさとに帰り、ここにとって沖縄の海に当たるのは何だろうと考えた時、それが、茸の採れる山や麦や米を作る里だったのです。

伊賀筑後オレゴンの実り具合を調べる野池さん

川中島のあたりはりんごを作る専業農家だったのですが、開発が進み次第に農地がつぶされています。そのなかで野池さんがこだわって守ろうとしているものに麦畑があります。

かつてこの辺りで米の裏作として広く作られていた麦畑はすっかり見られなくなりました。野池さんが復活しようとしている小麦は「伊賀筑後オレゴン」種といい、この小麦で作ったうどんは、実に美味しいそうです。

オレゴン種と佐賀筑後種とを伊賀で掛け合わせたこの品種はしかし、オレゴンでも築後でも伊賀でもあまり良く育たず、乾燥地帯のこの川中島で大変に良く育つのです。

川中島は年間雨量１０００ミリ（全国平均１７００ミリ）という雨の少ない乾燥地帯です。その川中島が、高温多湿を好む米作でも有数な穀倉地帯なのは、用水の発達のおかげです。戦国時代には川が氾濫しても戦乱のために治水に取り組むことができなかったのですが、江戸時代になり新田開発と合わせて用水が整備されるようになります。

重力に逆らってポンプを使って水を押し上げるのではなく、アルプスの雪解け水が豊かに流れ出す犀川から、下の千曲川へ、堰（せき）と呼ばれる用水路が網の目状に毛細血管のように幾筋も田を潤しながら流れこみます。それぞれの用水は田より少し高い位置にあるので、せき止めを切れば自然に田に水が流れ込みます。エコロジカルな自然の力（川の高低差の利用）を使い、地域全体を潤す素晴らしい堰は、それぞれに名前が付けられて、今も共同で管理されているそうです。

また、犀川に沿った河川敷の畑はみな川に直角に細長く仕切られています。川と平行に畑を所有すると、川が氾濫した時に被害を受けるのはある個人に集中します。直角に配置された畑

なら、みなで痛みを分け合えるのです。こんなところにもかつての共同体の智恵を見ることができます。

野池さんのお宅の前の古風なお庭の池の水も、実はこの堰から流れ込む、江戸時代の文化のおこぼれの水だといいます。高度成長時代の効率主義で直線的な道路が走り、24時間営業の大型店が作られ、土地区画整理がされて、地域が壊されていく今、この適正技術、文化を伝え守っていきたい、その一つの取り組みが伊賀筑後オレゴンを広めていくことでもあるそうです。

そんな野池さんにとって「たぁくらたぁ」の発刊はどんな位置づけなのでしょうか？

今やメディアは巨大化して「マスメディア」となり、一方インターネットを使った発信は個人個人の言い放しになっている。

個人とマスコミを繋ぐ自分達から発信するコモンズ雑誌を作りたい。いわば麦畑のメディア、地域に根ざしたかたちの発信、自分たちの生活から出発した産直泥付きマガジンを作ろうと発刊したといいます。

雑誌の販売も、（書店にも置いてはいますが）基本は人から人への手渡し、でも「押し売り」ではなく、昔の八百屋がリヤカーを引いて売り歩いたように、自分たちや応援してくれる人が「引き売り」する雑誌にしたい。

自分達が何を考えているかを発信して、その反応が返ってきたところで、またみんなで考えていく、「堰」になってみんなに水を運ぶようなコモンズ雑誌を目指す。

最初は季刊誌なんて大変だと思っていたのですが、始めてみるとこちらが思っていた以上の反響で、場を作ることの意味を再認識しています。インターネットで流すという方法もあったのですが、いろんな人の関わりの共同作業で作る雑誌に、あえてこだわりました。それにインターネットは自由で早く便利といっても、〝いざ〟という時、例えばホストコンピューターが機能しなくなってしまったら、個人ではどうにもできない、でもこういう雑誌なら最悪、謄写版でも作ることができるじゃないですか。書き手も読み手も参加して、商品としてもいい物を作っていきたいと思っています。

実が色づいたブルーベリー畑で

最近、未来に向けて、暗い気持ちになることが多い私は、ひょうひょうとマイペースの野池さんがうらやましくて、ついつい

「いろんなことに関わっていて、無力感に襲われてしまうことってないですか?」

とお聞きしてしまいました。

野池さんは私の愚問にあきれ顔で淡々と答えて下さいました。

無力感なんて言ったって、考えたら世界の人口60億かの中で、一人ができることは限りあるから、無力なのは当たり前、それをあらためて感じても始まらないよ。無力なのは当たり、今、目の前にあるものに取り組んでいって、大変は大変でも反応があって、手応えさえあれば続けられるでしょう。それで何か変わるかどうかはわからないけど…。できるかできないかは結果だからね。「たぁくらたぁ」だってさ、『道楽』だからこそいいもの作らなきゃ、『道楽』だからこそ言い訳できないものね。

2000年ＪＣＦ講座でうどん作りを伝授

伊賀筑後オレゴンは今年は少し生育が遅れて、今月末頃が収穫とのこと、とびっきり美味しいおうどんは今回はお話しだけで、だからよけいに私の中で美味しさが膨らんでいます。今度はとびきりのおうどんをご馳走になりに行きたいと思います。

野池さん、畑仕事の間の大事な『お昼休み』-に沢山のお話しをありがとうございました。これからは気が滅入った時は自分におまじないの言葉を言いましょう。

「たぁくらたぁ!」と…。

（事務局・布山）

戦後60年を問う会・まつもと

戦争　ヒバクシャ　いのちをキーワードに

戦争に加担することのない世界を…

「戦後60年を問う会・まつもと」の最初の取り組みとして「にがい涙の大地から」の上映会を開催します。

第１回上映	10：30 〜 12：00
監督のお話	12：00 〜 12：30
第２回上映	13：30 〜 15：00
監督との茶話会	15：00 〜 16：00
監督のお話	19：00 〜 19：30
第３回上映	19：30 〜 21：00

料金（大人・大学生）	
前売り券	1,000 円
当日券	1,200 円
高校生以下は無料	

手話通訳、要約筆記あり。

第１、２回上映は託児があります。

（7/14 までにＪＣＦまでお申し込み下さい）

主催：戦後60年を問う会・まつもと

後援：松本市教育委員会

『にがい涙の大地から』上映に向けて

苦しんでいる人がいる限り問題は終わっていない！

今年は終戦60年。しかし、今なお戦禍に苦しむ人々が、この地球上にいることを忘れてはなりません。「戦争」で日本がしてきたこと、受けたことを知らない私たちは、「今」を捉えることができません。この松本地域から、二度と戦争を起こさないように、戦争に加担することのないよう、私たちに何ができるか考えていこう、と松本市中央公民館とJCFが呼びかけ、一般市民有志が集まり「戦後60年を問う会・まつもと」として発足しました。

戦争・ヒバクシャ・いのち、さまざまなキーワードから連続的な学習会・イベントを行っていきます。

まず、7月16日（土）に海南友子監督の「にがい涙の大地から」の上映会を行うことになりました。上映会の代表川田龍平さんが、上映への思いを語ってくれました。

川田龍平さん

戦争の問題と自分が今まで闘ってきた薬害エイズの問題と共通しているところが多いんです。責任があいまいにされていたり、命を大切にしないところです。僕としては、共通する問題として考えて行かなくてはならないと考えています。

戦後60年と言うけど、本当に戦後なのか、今でもイラクに自衛隊（軍隊）を派遣していますし、自分たちで問うていかなければならないと思っています。まだ、自分たちは生まれていなかったのですが、60年前に使われた化学兵器が、今だに中国各地で被害を与えている事を、海南友子さんが映画で訴えています。特に中国のことは、4月から反日デモが起こっているのに、僕たちはあまりにも知らない。日本が中国にしてきたことを、しっかり伝えていかなければいけない、と思っています。

海南監督とは、東京で平和活動に一緒に参加したり、インドのムンバイで開かれた世界社会フォーラムへ行く船で3週間くらい共に行動した友達でもあります。海南さんの映画をぜひたくさんの人に見てもらいたいと思い、「戦後60年を問う会・まつもと」が発足した時、上映会開催を提案しました。

やはり戦後60年とは言っても、決して終わった話ではないのではないか。

60年前に遡っても、今の状態を見ても、そのままなのではないかと思います。戦後補償の問題など、なかなか機会が無いとそのままにしてしまうことなので、この機会に考えてほしいと思います。

4月、反日デモが盛んに行われた後、海南さんは北京に行きました。マスコミでは暴動のように報じられているが実際はどうなのか取材しました。その時の市民の気持ちとか、マスコミの報道には出てこない、市民がどう思っているかを聞いて、とても面白かった、と言っています。「日本では中国は愛国教育とか言われているが、実際はどうなのか」と教科書も買ってきたようですので、見せて貰えると思います。はたして、日本も愛国教育を進めようとしているけれども、本当の愛国ってどういうことなのか、そこから考えてみたいと思います。海南さんは、継続的に中国に行っています。中国の日常的かつホットな話を聞きたいと思います。

僕の受けてきた教育では、近現代史がいつもおろそかにされてきました。中高一貫校では違うのかも知れませんが、公立の学校に通ってきた僕は、いつも近現代史と今が結びつかないんですね。今の政治的状況からも、しっかり知らなくてはいけないと思っています。また、大学にも留学生が来ていますが、彼らとつき合っていく時、実際に彼らのおじいさんやおばあさんは日本人によって殺されているんです。僕たちのおじいさんが中国でしてきた事を知らずに、相手と交流していくことは難しいと思います。

薬害エイズの被害者として、国に対し、被害者と国の責任について関わってきた中で、彼ら戦争の被害者に非常に共感できます。どこに責任があるのか、どこが責任をとらなければならないか、真相が解明されず、心からの謝罪がされてないことは、どんなに時間が経っても癒される問題ではありません。

いまだにそのことで苦しんでいる人がいる事を知ってほしいと思います。中国のことを、自分の持っている問題と共通するものとして、知ってほしいと思いますね。個人に対する補償の問題というのは、他の問題と同じく解決されていない。

山形のドキュメンタリー映画祭にも招待された作品です。いろいろなところで上映会が拡がり、中国の中央電視台で取り上げられました。

中国の問題も、今なお続いている自衛隊のイラク派遣にも、また、戦争に進んでいきそうな雰囲気になってきている事に、責任は自分たちにあることを感じないでいます。自分たちが主権者のはずなのに、そうなっていない。60年前と同じなのではないかと思います。

（川田龍平・談）

萬粗忽堂本舗

店主　村石　保

その十

きみの胸の傷口は、今でもまだ痛むか

この国では、戦争など国事に殉じた者は「英霊」、つまり「神様」となって、靖国神社に祀られるという〈神話〉が、敗戦から六〇年を経た二十一世紀のこんにちに至っても、実しやかに罷り通っているから、面妖である。

神話の真偽はともかくとしても、一国の宰相による、靖国神社参拝という、紛れもない宗教活動の是非をめぐって、内外に大きな波紋を投げかけていることだけは事実である。たとえ、小泉首相が、八月十五日の敗戦記念日に靖国に参拝しようと、しまいと、A級戦犯が合祀されていようと、いまいと、そこに祀られた戦没者が、神（柱）であるとするならば、国の最高権力者が政教分離の原則を犯していることは明白である。

小泉首相の「こんにちの国家繁栄のために、犠牲になられた人々の御霊に哀悼の誠を捧げる」という常套句は、靖国神社が、国家繁栄のための犠牲者を祀る装置であることの証左であり、参拝への固執は、政治家としての自己を正当化するための、つまり憲法改正へのデモンストレーションにほかならない。

靖国神社とは、お国のためには死を厭わない――死して英霊＝神になるための――神話装置であり、同時に、天皇制堅持継続のためのメディアでもある。

六〇余年前、日本帝国の一兵卒であったわたしの父は、戦地フィリピンでマラリヤを患い、傷病兵として不名誉の帰還をした。そのときの高熱によって、父は片目を失った。戦後、父は人前では精巧に作られた義眼を入れて通した。たいがいの人は、父が義眼を入れていたことは、知らなかった。八四歳で父が亡くなったとき、その役目を終えた義眼も、父と一緒に棺に納めた。

生前、父は「もし、自分の息子が戦争に採られるようことになったなら、息子の腕を落としてでも、戦争だけには行かせない」と言っていた。父は、英霊として靖国神社に祀られることはなかった。

この季節――入梅から盛夏の頃になると、きまってある一篇の詩の存在を思い出す。

＊　＊　＊

死んだ男

たとえば霧や／あらゆる階段の跫音のなかから、／遺言執行人が、ぼんやりと姿を現す。／――これがすべての始まりである。／遠い昨日……／ぼくらは暗い酒場の椅子のうえで、／ゆがんだ顔をもてあましたり／手紙の封筒を裏返すようなことがあった。／「実際は、影も、形もない？」／――死にそこなってみれば、たしかにそのとおりであった。／Mよ、昨日のひややかな青空が／剃刀の刃にいつまでも残っているね。／だがぼくは、何時何処で／きみを見失ったのか忘れてしまったよ。／短かった黄金時代――／活字の置き換えや神様ごっこ――／「それがぼくたちの古い処方箋だった」と呟いて……／いつも季節は秋だった、昨日も今日も、／「淋しさの中に落葉がふる」／その声は人影へ、そして街へ、／黒い鉛の道を歩みつづけてきたのだった。／埋葬の日は、言葉もなく／立会う者もなかった／憤激も、悲哀も、不平の柔弱な椅子もなかった。／空に向かって眼をあげ／きみはただ重たい靴のなかに足をつっこんで静かに横たわったのだ。／「さよなら、太陽も海も信ずるに足りない」／Mよ、地下に眠るMよ、／きみの胸の傷口は今でもまだ痛むか。

＊　＊　＊

鮎川信夫による、優れた戦後詩の結実である。Mとは、鮎川が敬愛してやまなかった詩人森川義信のことである。森川は昭和十七年八月十三日、ビルマのミトキーナで戦病死した。

Mの無念の死は、靖国神社に祀ることで、鎮めることなど断じて不可能である。「太陽も海も信ずるに足りない」と言い残したMにとって、死して神になることはない。ただ、Mは、戦争の理不尽と対峙し、空に向かって眼をあげ、静かに横たわっただけである。そのMの死には、憤激も、悲哀も、不平の柔弱な椅子も存在しなかったのだから、「英霊」になることはない。

戦後六〇年、わたしたちには、いまだ、Mの胸の痛みを癒す術をしらない。

こんにちは！

花も嵐も、講釈師が語ります

バツイチ子連れ、泣き笑い半生記

神田香織

パパンパン。

はり扇が打たれ、神田香織さんが半生を語ります。

自他共に認める美貌をもって女優を志し、そして講談師神田紅さんとの出会いから神田山陽さんの弟子となり、芸の道に入られます。前座修行から二つ目昇進記念に訪れたサイパン、バンザイクリフに立った神田さんは一気に戦争・命を講談のテーマに取り込んでいくことになります。海の色が赤く染まったと言われる、この地で自害した人々への思いが神田さんを駆り立てます。広島をテーマにした「はだしのゲン」、「チェルノブイリの祈り」、効果音と照明を使った立体講談は大迫力です。

著者・神田香織
発行・七つ森書館
定価・1890 円（税込）

波瀾万丈の神田さんの来し方も、前向きに芸の肥やしになっていく様子が歯切れ良く綴られています。

２年前、ベラルーシのドキュメンタリー作家スベトラーナ・アレクシェービッチさんが来日された時、松本で「チェルノブイリの祈り」を語っていただいた。日本の伝統芸として語られたチェルノブイリの物語にスベトラーナさんも喜ばれ、人々とコンタクトする新たな方法と、聴衆と一体となった講談に現代の社会の問題をのせていく可能性を語り合っている。

パパンパン。社会のリズムを感じ取り、自らの感性で語り継ぐ神田さん。まだまだ蕾から三分咲きと言われるが、ここまで来たら、もうその美貌に嫉妬を呼ぶこともないように思えます。女の顔も自ら創ってこられたのですから。

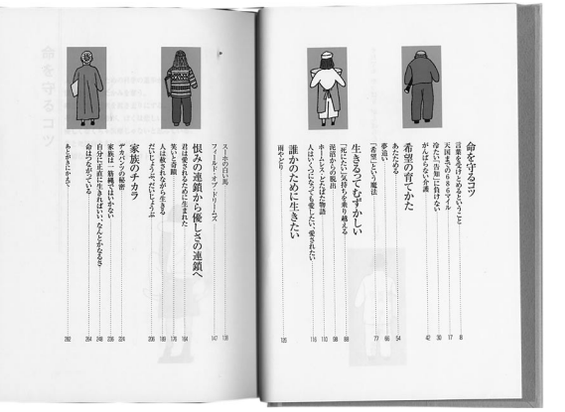
Здравствуйте!

それでもやっぱりがんばらない

鎌田　實

何度も聞いてきたタイトルの本。

ページを繰っていく。「来年の桜はもう見られない」という末期がんの患者さんのひとり言を受けとめた看護師さん達の物語は、淡いさくら色の地に綴られていく。ずっと働き続けてきた男性が残された時間にさだまさしさんの歌を聞きたいと願う章には、萌葱色の中に車椅子の男性が描かれている。隅々にやさしさがあふれている。



著者・鎌田實
発行・集英社
定価・1680 円（税込）

「だいじょうぶ、だいじょうぶ」と白血病の子ども達を抱きしめていたタチヤーナ・シュミヒナ先生は、ＪＣＦに関わる者として、想いがあふれる。

普通の暮らしの傍らにあるささやかな希望が、どんな時にも「いのち」に輝きをあたえていることを語っている。後ろ姿の登場人物たちは、私であり、隣にいるあなたでもある。

また、全編を通して、ご自身を見つめようとされている。家族は、血のつながりに甘えず、手探りで作っていくもの、育ちあっていくもの。決して頑な世の慣習にしばられない先生のおおらかさがみえてくる。“受容する”やさしさはどこまで繋がっていくのだろう。信州から、日本から、中東の国イラクに向かって、両手を広げ、ほほえみながら歩き出している。

ニュースクリップ

＜国　内＞

●伊方原発、1次冷却水漏れ

愛媛県と四国電力は、定期点検中の伊方原発3号機の原子炉補助建屋内にある余熱除去ポンプの封入部から、放射能を含む1次冷却水約300リットルが漏れたと発表した。外部の環境への影響はないとしている。（3月16日　時事通信）

●高速炉2050年に商業化

原子力政策の基本方針を定めた原子力長期計画の改定論議をしている原子力委員会の新計画策定会議に、経済産業省資源エネルギー庁は、2050年ごろから高速増殖炉を導入するとの電気事業者の見解を盛り込んだ長期的な原子力政策の見通しを示した。原子力発電については、2030年以降も発電総量の30－40％を維持するべきだとしている。（3月16日　共同通信）

●もんじゅ訴訟上告審弁論

高速増殖炉原型炉もんじゅ（福井県敦賀市）をめぐり、住民32人が原子炉設置許可の無効確認を求めた行政訴訟の上告審弁論が最高裁第一小法廷であり、国側は請求を認めた2審名古屋高裁金沢支部判決の破棄を主張、住民側は「安全審査に重大な誤りがあるのは明らか」として上告棄却を求めた。（3月17日　共同通信）

●美浜原発事故最終報告書を承認

昨年8月の美浜原発3号機事故で、経済産業省原子力安全・保安院は、破裂した配管の減肉を長年にわたって見落とした関西電力の管理ミスが事故の直接原因だとする最終報告書を事故調査委員会に提出、承認された。報告書は、配管管理を電気事業者任せにしていた国も反省すべきだとした。（3月30日　共同通信）

●鉄塔倒壊、志賀原発手動停止

石川県羽咋市で、北陸電力の50万ボルトの送電線を支える鉄塔が地滑りのため倒壊し、能登地方の約10万9200世帯が最大で8分間停電した。50万ボルト級の送電線を支える鉄塔の倒壊は全国で初めて。この影響で志賀原発1号機は送電できなくなり、原子炉の運転を手動停止した。（4月2日　時事通信）

●ＭＯＸ燃料工場受け入れ表明

三村青森県知事は県庁で記者会見し、日本原燃（青森県六ケ所村）が建設を予定しているウラン・プルトニウム混合酸化物（ＭＯＸ）燃料工場について、「安全性確保が第一義」とした上で、「地域振興への寄与を大前提に受諾する」と述べ、受け入れを表明した。（4月14日　時事通信）

●経産省、島根原発3号機設置許可

経済産業省は、中国電力が松江市に計画する島根原発3号機の設置を許可した。原発の設置許可は通算57基目で、北海道電力泊3号機以来1年9カ月ぶり。（4月26日　毎日新聞）

●もんじゅ訴訟、住民側逆転敗訴

1995年にナトリウム漏れ事故を起こし、運転停止している核燃料サイクル開発機構の高速増殖炉原型炉「もんじゅ」をめぐり、周辺住民32人が国を相手に設置許可の無効確認を求めた訴訟の上告審判決で、最高裁第1小法廷（泉徳治裁判長）は、設置許可を無効とした2審名古屋高裁金沢支部判決を破棄し、住民側の訴えを棄却した。住民側の逆転敗訴が確定した。（5月30日　時事通信）

＜海　外＞

●インド、津波で原発作業員ら死亡

インド政府の原子力エネルギー当局は、昨年12月のスマトラ沖地震の津波で、チェンナイ近郊カルパッカムの原発で女性作業員1人が死亡、宿舎でも37人が死亡したと発表した。「放射能漏れはなかった」としており、主な死因は水死とみられる。（3月10日　共同通信）

●ロシアのチェルノブイリ被ばく者145万人

ロシアのズラボフ保健・社会発展相は閣議で、史上最悪の放射能漏れ事故となった1986年のウクライナ・チェルノブイリ原発事故の被ばく者名簿を初めて作成したことを報告し、事故で健康被害を受けた被ばく者が、ロシア国内で145万人に上ることを明らかにした。（4月12日　時事通信）

●ウクライナ、チェルノブイリ死者150万人か

ウクライナの民間組織、チェルノブイリ身体障害者同盟は、チェルノブイリ原発事故の影響で、過去19年間にウクライナ人150万人以上が死亡したとする調査をまとめた。国内の被ばく者は約350万人で、うち児童が120万人に上り、現在も汚染地域に230万人、放射能警戒地域に160万人が居住するという。（4月24日　時事通信）

●チェルノブイリ除去作業7万人が身障者

チェルノブイリ原発事故発生から19年目の26日、ロシアの被害者組織「ロシア・チェルノブイリ同盟」のグリシン議長が記者会見し、事故後に放射能除去作業に参加したロシア人25万人のうち、7万人が放射能を浴びて身体障害者になったことを明らかにした。（4月26日　時事通信）

●チェルノブイリ事故から19年

ウクライナのチェルノブイリ原発事故の発生から19年たった26日、同国の首都キエフでユーシェンコ大統領らが出席して犠牲者の追悼式典が開かれた。放射性物質の汚染地帯を抱え、多くの被災者が住む隣国ロシアやベラルーシでは、国の被災者政策に抗議する動きがあった。（4月27日　朝日新聞）

●ＮＰＴ再検討会議開幕

核軍縮や核拡散の状況を点検、今後の行動計画策定を目指す核拡散防止条約（ＮＰＴ）再検討会議が190近い加盟国が参加してニューヨークの国連本部で開幕した。（5月2日　共同通信）

●英核施設で放射性溶液漏れ

英科学誌などによると、英中西部セラフィールドにある使用済み核燃料の再処理施設「ソープ」の無人区域内で放射性の液体が漏れる事故があり、作業が無期限に停止された。漏れた放射性溶液は約83立方メートルで、大量のプルトニウムやウランを含んでいた。（5月11日　共同通信）

●チェルノブイリ原発新石棺建設基金

ウクライナのチェルノブイリ原発4号機を覆う巨大なコンクリート製の遮へい物「新石棺」建設を目指す支援国会合がロンドンで開かれ、欧州連合（EU）などが計1億8500万ドル（約198億円）の拠出を表明した。計28カ国が出資する建設基金の総額は10億ドル（約1070億円）に達した。事故直後に建設された現在の石棺には老朽化のためひびが入り、崩落の恐れも指摘されている。このためウクライナと主要国（Ｇ８）、EUが中心となって4号機を石棺ごと覆う「新石棺」を2009年までに建設する計画を進めている。（5月13日　共同通信）

●ベラルーシ政権転覆を画策

ロシア連邦保安局（ＦＳＢ）のパトルシェフ長官は下院公聴会で、「非政府組織（ＮＧＯ）を装った外国の情報機関が、ベラルーシで政権転覆を画策している」と証言した。名指しこそ避けたが、米国など西側の情報機関がベラルーシで民主革命を狙っているとの見方を強く示唆した。（5月13日　毎日新聞）

●ＮＰＴ再検討会議、米とイラン対立

19日に実質協議入りしたＮＰＴ再検討会議は、審議開始早々から米国とイランの対立が鮮明となった。米国は「ＮＰＴに違反し核兵器開発を目指している」とイランを批判した。これに対して、イランは「米国は小型核の研究を進め、核軍縮努力が不十分」と主張した。（5月20日　毎日新聞）

●マーシャル住民、核実験でがん増

米国が1946－58年に中部太平洋・マーシャル諸島で実施した計66回の原水爆実験をめぐり、当時の住民約1万4000人の間で、がんの発生は放射性降下物（フォールアウト）被ばくの影響で9％増え、放射線起因のがんが約530例と見積もられ、その半数はこれから発生するとの予測が、米国立がん研究所が米上院エネルギー委員会に提出した報告書で判明した。（5月24日　共同通信）

●ＮＰＴ再検討会議、決裂

ＮＰＴ再検討会議は、「核軍縮」「原子力の平和利用」に関する両委員会で実質問題の協議が紛糾、いずれも合意がないまま作業を終えた。これで「核不拡散」委員会と合わせ、3つの主要委員会すべてで協議が決裂、最終文書を採択できないことが確実になった。（5月26日　時事通信）

Book

ノーモア ヒロシマ・ナガサキ

黒古一夫／清水博義・編

本書は、敗戦後60年の原点となる「被爆体験」を風化させてはならないと刊行された。写真、絵画、エッセイ、峠三吉・栗原貞子・原民喜らの詩などで構成され、ヒロシマ・ナガサキの原爆被爆の実相を伝えている。日英二カ国語表記。

原爆写真　ノーモア ヒロシマ・ナガサキ
編者：黒古一夫／清水博義
翻訳者：ジェイムス・ドーシー
発行：日本図書センター
定価：1890 円（税込）

Book

マーシャル諸島 核の世紀

豊崎博光

フォトジャーナリストである著者が、太平洋中西部・マーシャル諸島を中心に世界各地を取材し、核実験が及ぼす被害の実相と影響、世界の核兵器と原子力開発をめぐる情勢を描く。世界各地の核被害者、日本の被爆者の実情、反核・反原発運動も論述している。

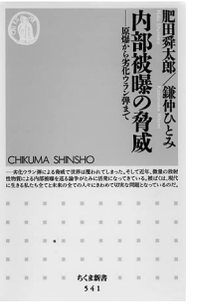
マーシャル諸島 核の世紀
1914-2004（上・下）
著者：豊崎博光
発行：日本図書センター
定価：各 6090 円（税込）

Book

内部被曝の脅威

肥田舜太郎／鎌仲ひとみ

放射性物質を体内にとりこみ、長時間にわたって身体の内側から放射線を浴びる内部被曝。広島での原爆被爆後、60年にわたり内部被曝の研究を続けてきた医師とジャーナリストが、内部被曝のメカニズムを説き明かし、その脅威の実相に迫る。



内部被曝の脅威
—原爆から劣化ウラン弾まで（ちくま新書）
著者：肥田舜太郎／鎌仲ひとみ
発行：筑摩書房
定価：714 円（税込）

Book

子どもたちが生きる世界はいま

豊田直巳

フォトジャーナリストである著者が、巨大地震と津波が襲ったアチェ、今も戦争が続くイラン、レバノン、そして沖縄、モンゴル、ナガランドなどで出会った子どもたちが生きる世界を伝える。

子どもたちが生きる世界はいま
著者：豊田直巳
発行：七つ森書館
定価：2310 円（税込）

Book

リトルバーズ

綿井健陽

ビデオジャーナリストの著者は、アメリカ軍によるイラク侵攻以来、精力的にイラクからの中継リポートを続けてきた。著者が1年半の取材映像から製作した映画『Little Birds』の撮影日記、ルポとイラクの現状を伝える写真からなるノンフィクション。

リトルバーズ　戦火のバグダッドから
著者：綿井健陽
発行：晶文社
定価：1680 円（税込）

Book

エイズとの闘い—世界を変えた人々の声

林 達雄

発症を抑える画期的新薬が開発されたエイズ。しかしWTOの推進する知的所有権保護政策は安価な治療薬の生産を阻み、今も多くの命を奪っている。この絶望的な状況であげられた患者たちの声は人々の共感を呼び、ついには強固な国際ルールをも崩し始めた。世界を変えた彼らの声を通して、真の国際協力とは何かを問う。

エイズとの闘い—世界を変えた人々の声（岩波ブックレット）
著者：林 達雄
発行：岩波書店
定価：504 円（税込）

ヒロシマ・声なき声

細川俊夫

細川俊夫作品集 音宇宙Ⅷ
「ヒロシマ・声なき声」
演奏：
シルヴァン・カンブルラン 指揮
ナタリー・シュトゥッツマン（アルト）
バイエルン放送交響楽団
バイエルン放送合唱団、他
発売：フォンテック（FOCD 3491）
定価：3059 円（税込）

広島出身で欧州を中心に活動する作曲家・細川俊夫による〈独唱者、朗読、合唱、テープ、オーケストラのための〉作品（1989―2001年）。ラテン語のレクイエム、『原爆の子』、パウル・ツェランの詩、芭蕉の句がテキストに使われている。被爆60年の今年7月、この作品は広島で作曲者自身の指揮により日本初演される。

原爆小景・完結版

林　光

林光 合唱作品集「原爆小景・完結版」
曲目：原爆小景［完結版］(1958/2001)
　　火の夜 (1972)
　　カザルスのために - カタルーニャ民謡「鳥の歌」による (2002)
　　星めぐりの歌 (1985)
演奏：林光 指揮　東京混声合唱団
　　寺嶋陸也（ピアノ）
発売：フォンテック（FOCD 9186）
定価：2100 円（税込）

表題作の『原爆小景』は、広島で被爆した作家・詩人の原民喜の詩と散文に林光（はやし・ひかる）が作曲した混声合唱曲。「水ヲ下サイ」（1958）、「日ノ暮レチカク」「夜」（1971）、「永遠（とわ）のみどり」（1991）の4曲からなり、43年を経て完結された。

ヒロシマのオルフェ

芥川也寸志

芥川也寸志：歌劇「ヒロシマのオルフェ」
演奏：本名徹次 指揮
　　オペラハウス管弦楽団・合唱団、他
発売：カメラータ東京（CMCD 28009）
定価：2940 円（税込）

台本・大江健三郎、作曲・芥川也寸志によるこのオペラは、1960年にラジオ放送のために作曲された（原題は『暗い鏡』）。原爆で顔にケロイドの傷を負い絶望した青年が、鏡の中の娘（死の国の娘）に出会い、未来への希望を抱き、ケロイドの手術を決断するが…。

夏の花・心願の国

原 民喜

夏の花・心願の国（新潮文庫）
著者：原 民喜
発行：新潮社
定価：460 円（税込）

現代日本文学史上もっとも美しい散文で、人類はじめての原爆体験を描き、朝鮮戦争勃発のさ中に自殺して逝った原民喜の代表的作品集。被爆の前年に亡くなった妻への哀悼と終末への予感をみなぎらせた『美しき死の岸に』の作品群、『夏の花』三部作、『鎮魂歌』、絶筆『心願の国』『永遠のみどり』などを収録。

新編 原爆詩集

峠 三吉

新編　原爆詩集
著者：峠 三吉
解説：中野重治／鶴見俊輔
発行：青木書店
定価：1050 円（税込）

ちちをかえせ　ははをかえせ…
わたしをかえせ　わたしにつながる　にんげんをかえせ…
誰でもが一度は目にし耳にしたことのある「序」をもつ不朽の名詩集に、鶴見俊輔氏の「1995年の解説」を付した新装版。60年前のヒロシマから詩人が託した核時代への伝言。

原爆の子

長田 新・編

原爆の子（全二冊）（岩波文庫）
編者：長田 新
発行：岩波書店
定価：（上）735 円（下）693 円（税込）

火炎地獄の中で、母に抱かれて息をひきとる子ども、父親に子どもたちのことをたのみ、家の下敷きになったまま死んでゆく母親…。広島の少年少女たちの心に消えない傷跡を残した原爆の恐ろしさを教えてくれる。自らも広島で被爆した編者が平和教育のために編集した原爆体験手記。

セイコーエプソン労働組合より
福祉助成機器を頂きました！

セイコーエプソン労働組合では、社会貢献事業として、組合員のみなさんのボーナス支給時にカンパを募り、集まった資金で年間約20団体に、エプソン機器をプレゼントしています。

ＪＣＦも４月５日にプリンター２台とプロジェクターの支援をして頂きました。

頂いた機器は、４月21日から松本市中央公民館で開催された本橋成一さんの「無限抱擁」写真展のＪＣＦ活動報告展示パネル作り、講演会プレゼンテーションスライドショー等で大活躍しています。

画家がチェルノブイリに行ったら…

早いお見送りでした。画家の貝原浩さんが、6月30日、お亡くなりになりました。ＪＣＦの広報誌「グランド・ゼロ」の題字は貝原さんが書いてくださいました。

92年５月、ＪＣＦの医療訪問団と共にベラルーシを訪問した貝原さんは、一気に「風下の村から」を描ききってくださいました。私たちは、貝原さんが描いてくださった画文から、奇しくも“風下”になってしまった村人の暮らしを知ることができました。かの地に暮らす人々の受けた理不尽な暴力を“墓標のように立つペチカ”が語っています。

医療支援を進めるＪＣＦで、貝原さんは「画家として何ができるだろう」と自問していたのだろうと察します。するどい目で見つめ、やさしい心ですくい取り、軽妙な語り口で私たちに伝えてくださったたくさんの事を、私たちはグランド・ゼロから更に広く発信していきます。（事務局・神谷）

Information

グランドゼロ GROUND ZERO JCF

第64号

発行日　2005年6月26日
発行人　鎌田實
発行所
日本チェルノブイリ連帯基金

イラスト題字　貝原浩
イラスト　武内裕子
重岡朱
表紙デザイン　酒井隆志
スタッフ　神谷さだ子
布山みな子
協力　風樹　光
重岡　朱
佐内裕之
印刷　電算印刷

■編集後記

母が亡くなった時、引き出し一杯の手ぬぐいとタオルが、きっちりと畳まれあった。戦時中、それらがどんなに貴重だったかを聞かされて育った私は、母の残した手ぬぐいを捨てることができない。それなのに私には母から聞かされた戦時中の辛い話を、子ども達に伝える自分の言葉を持たない。今、“戦後”60年ということで、様々な企画や「言葉」があふれている。子どもに伝える「自分の言葉」を捜していきたい。　（布山）

■事務局日誌■

＜３月＞
29日　招聘医師コーディネート（徳島日赤病院）
30日　JIM-NET打ち合わせ（東京）
31日　グランドゼロ第63号発送作業

＜４月＞
４日　NPO学習会（松本市中央公民館）
５日　エプソン機器助成贈呈（ＪＣＦ事務局）
６日　連続講座企画準備会（松本市中央公民館）
15日　JIM-NET会議（諏訪中央病院）
21日　写真展準備作業（松本市中央公民館）
22～28日　本橋成一写真展「無限抱擁」（松本市中央公民館）
27日　アルプスフロント市民フォーラム理事会（ＪＣＦ事務局）

＜５月＞
２日　理事会準備作業
12日　戦後60年を問う会ミーティング（松本市中央公民館）
14日　佐藤真紀講演会（松本市中央公民館）
ＪＣＦ理事会（松本市中央公民館）
19日　アルプスフロント市民フォーラム懇話会
26日　戦後60年を問う会ミーティング（松本市中央公民館）
28日　新潟講演会（神谷）（新潟ユニゾンプラザ）
29日　招聘医師帰国見送り（関西国際空港）

＜６月＞
６日　アルプスフロント市民フォーラム懇話会
13日　戦後60年を問う会ミーティング（松本市中央公民館）
17日　戦後60年を問う会・記者会見（松本市役所）
18日　JIM-NET会議（東京・ＪＶＣ事務所）
22日　チェルノブイリ20周年行事企画会（松本市内）
25日　チェルノブイリ20年目に向けて（東京・カタログハウス）
28日　戦後60年を問う会ミーティング（松本市中央公民館）

ＪＣＦ／日本チェルノブイリ連帯基金

●本部　〒390-0303
長野県松本市浅間温泉2-12-12
TEL 0263- 46- 4218　FAX 0263- 46- 6229
E-mail　jcf@jca.apc.org
Website　http://www.jca.apc.org/jcf/

●東京　〒164-0003
東京都中野区東中野4-4-1 ポレポレタイムス社気付
TEL03- 3227- 1405　FAX03- 3227-1406

●京都　〒607-8405
京都府京都市山科区御陵田山町13-3
TEL075- 591- 7772